

本発表では、天台教学における実践の理念として、『維摩経文疏』に展開される三観説の意義を論ずる。

『維摩経文疏』は、『維摩経玄疏』『四教義』『三観義』などととも、天台智顛（五三八―五九七）晩年の思想が展開された重要文献であることが知られる。しかしながら、天台教学が『法華経』を中心とする体系であることなどから、未解明の部分が多い。とりわけ、『維摩経文疏』のみに見られる教義の研究は進展していない。別相三観・通相三観・一心三観から成る三種三観は、その一例であり、通相三観は他の文献では全く言及されない。また、『維摩経文疏』における説示にしても、必ずしも体系的になされたものではなく、何より智顛自身の註釈が未完であるため、その意義が問題とされてきた。

近年の研究によって、『維摩経文疏』における通相三観の説示内容については徐々に解明されているが、通相三観という観法が設定された由来や、教学上の位置づけについては、十分な検討がなされているとは言い難い。また、三種三観が日本天台ではどのように受容されたのか、と言う問題についての研究は、一層立ち遅れている。

こうした研究状況に鑑みて、『維摩経文疏』における智顛の説示、とりわけ、実践の階梯の全体的な構想との関連から、三種三観設定の意図を考察する。その際、日本天台における受容にも留意する。

『維摩経』は方等部の經典であり、「生蘇不定」の教が説示される。智顛は、仏国品の註釈において、大小乗、法行或いは信行の人が、根の利鈍、乗戒の緩急に応じて、修証する過程を詳説している。『維摩経』のうち、仏国品から菩薩品に至る未入室の四品で四教が説かれるのは、凡夫の著楽を弾呵するためであり、続く問疾品からの室内六品では、それを前提に三教三観が説かれることになる。菩薩品を積する箇所では、法行人―転観、信行人―転教といった図式が示され、利根における毒発不定に言及しつつ、入不二法門への様々な道程が示される。その上で、室内六品では、三藏教と通教の二乗を除く行者の階梯が詳説されるのである。したがって、室内六品の冒頭に位置する問疾品の註釈で説示される通相三観については、『維摩経文疏』の構想、すなわち、方等時の經典における、多様な機根の成仏への通路の確述、という観点から理解すべきである。

ところで、通相三観の教理的な基礎については、後教への接続を含む概念である以上、被接が連想されるのは当然であるが、それは趙宋天台の学匠智円の理解によるものであり、智顛が明言したわけではない。そもそも智顛本人が円教と明言していることから、文字通り円教の観法と解すべきである。その際、『維摩経』における三観について、被接の可能性を肯定しつつ、『四念処』に説示される通別・通円という教理に言及する宝地房証真の言説が参考となる。

社会的な実践に仏教が関わる場合、具体相では、教理的な側面は必ずしも強調されない。しかし、実践の基盤をなす理念は、教理の研鑽を通じて形成されるのである。本発表では、三種三観の構想を中心に論ずるに留まったが、智顛の思索の到達点を示す『維摩経文疏』には、解明すべき問題が山積している。これらについては今後の課題にしたい。